

家事の外部化のケーススタディ：シンガポールの
共稼ぎ世帯におけるメイド雇用・家計管理の実態

Case Studies of Outsourcing of Housework: Actual Situation
of Maid Employment and Household Management
of Dual-Career Couples in Singapore

高 橋 桂 子

Keiko TAKAHASHI

key words; Singapore, dual-career couple, maid, outsource

【Purpose】 When married women with children would try to continue their jobs, it is indispensable to make work-family balance without outsourcing any housework or child-care according to the life stage. The methods of outsourcing housework are various depending on the countries. In Japan, the dual-career couples outsource child-care most in all housework. But in Singapore, the government established *The Foreign Domestic Maid Scheme* in 1978, so people have been employing them and outsourcing housework positively. In this paper, I will examine the actual condition of maid employment and household-management of the dual career couples through the interviews.

【Method】 The interviewees were married women who have maid, children, husband working as professional, and bachelor-degree. Five of them work as the regular full-time workers. Two of them were interviewed for the comparison: one of them is a housewife after quit her job, and another is a Japanese woman who married with a Singaporean. The interviews were held at their offices or homes for from 1.5 hours to 3 hours during 10th to 20th September in 2006.

【Results】 The main results are as follows:

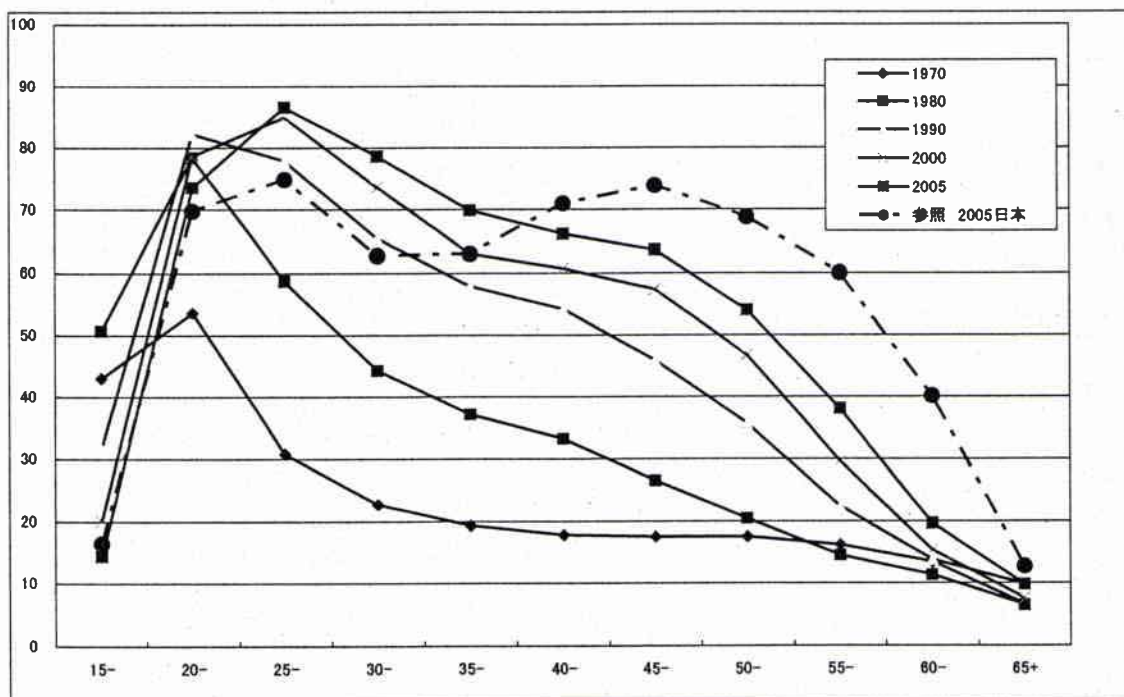
1. In Singapore, almost respondents have the idea that they could put their trust only in relatives. The reason why dual-career couples in Singapore employ live-in maid is that they could outsource housework but not child care.
2. Fathers are positively involved in child care. They sometimes change their jobs, or coordinate their jobs so as to share time and space with their family such as dinner.
3. The housework of maid is quite simple such as cooking, washing and mowing the gardens. It is rare that maid is deposited some cash, but if so, the amount is very few and is checked every week. The total cost of maid employment is about 10 percent of respondent's salary.

1. 問題関心

高齢化・少子化の同時進行により、わが国は未曾有の高齢社会を迎えている。様々な政策を導入しているにも関わらず、依然として出生率は低下傾向を示す中、従来はさほど活用されてこなかった既婚女子が新たな労働力人口として本格的な注目を集めはじめている。男子世帯主雇用者世帯に限定すると1992年以来、兼業主婦世帯数が専業主婦世帯数を上回り、我が国も共稼ぎ世帯が過半数を占めている。既婚女子を本格的に労働力として活用しようとする場合、雇用政策のみならず、家族政策の観点からも検討することが必要である。

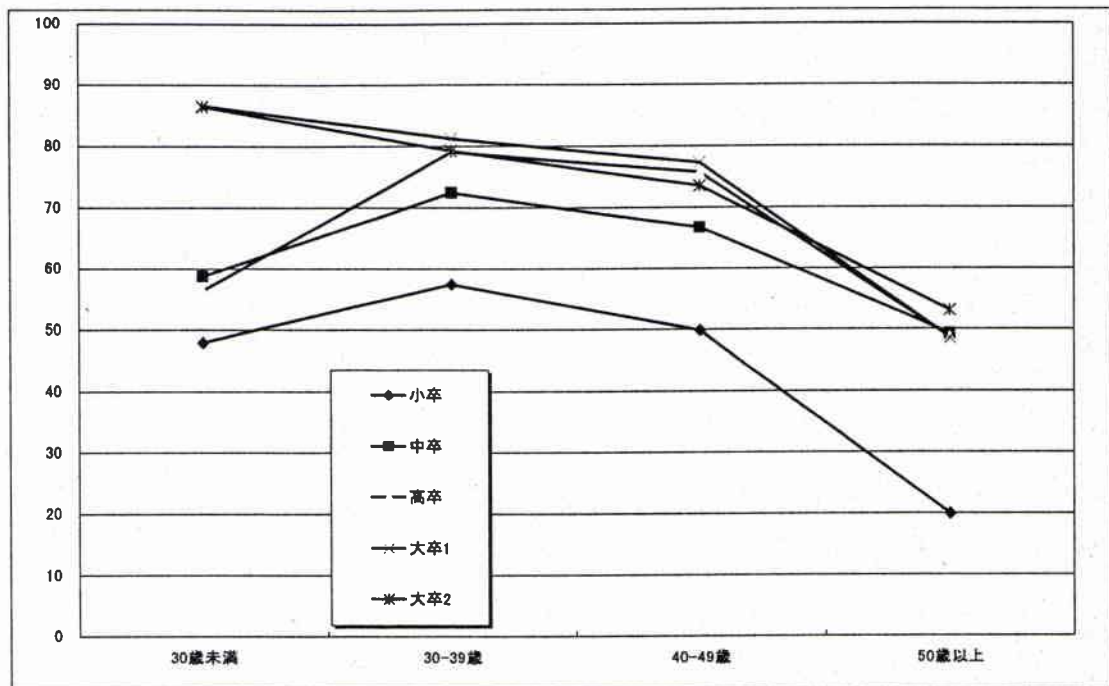
このとき参考になる国の1つがシンガポールである。都市国家シンガポールでは、人材こそ資源との明確な国是のもと、積極的に共働き世帯を支援する政策を導入している。たとえば、メイド雇用 (the foreign domestic maid scheme) の導入 (1978)、有子共稼ぎ世帯に対して所得税法で一定レベルの学歴以上の働く母親に対して税控除を適用する (1987)、ベビーボーナス制度の導入 (2001)、働く母親がメイドを雇用する場合の外国人メイド雇用税の税控除拡大など包括的少子化対策の導入 (2004)、などである。現在では、4世帯に1世帯の割合で何らかの形態でメイドを雇用し、住み込みのメイド (live-in maid) は7世帯に1世帯といわれる (Thang(2005))。炊事・洗濯といった日常家事をメイドに任せ、しかも街中至る所にホーカーズ・センター (集合屋台センター) があり、外食が当たり前のシンガポール。このシンガポールで家族を持ち、正社員として就業している女性たちはどのような日常生活を送り、家庭生活と仕事生活の両立を図っているのだろうか。2006年8月下旬から9月下旬にかけて、シンガポールに滞在する機会をえた。この間、メイドを雇用する7人の既婚女性にヒアリング調査を実施した。

本稿は、大卒で子どもがいて、正社員として仕事をしながら、メイドを雇用している既婚女性を対象に、メイド雇用と家計管理の実態をみたものである。構成は次のようである。続く第2節ではシンガポールの労働とメイド雇用について概観する。第3節で調査方法についてみた上で、第4節ではヒアリングからえた結果を報告する。第5節で考察を行う。



(出典) Singapore Department of Statistics (2006), Table4.3 Age-Specific female Labour Force Participation Rates

図1 年齢階級別にみた女子労働力率の推移 (1970-2005)



(出典) Ministry of Manpower (2003), Table2: Age-Specific Labor Force Participation Rate by Education and Sex 2003

図2 最終学歴別にみた年齢階級別女子の労働力率2003

2. シンガポールの労働・メイド雇用の概観

(1) シンガポールの女子労働

シンガポールの2005年の女性労働力率は56.6%, 年齢階級別にみた女子労働力率は馬の背型を呈している。1970年から過去35年間の推移をみると、年々、労働供給量が増加している様子がわかる。これを日本の女子の年齢階級別労働力率と比べると、1) 若い頃はシンガポールの方が労働供給が多いが、中高年では日本の方が多くなる、2) 年齢階級別労働力率はシンガポールでは馬の背型を描くが、日本ではM字型である、などがわかる。

1人当たりGDPが2.68万ドル(US)と、我が国(3.52万ドル)の3/4のシンガポールでは、戦前の日本にみられたように、最終学歴別に月給に大きな格差がある。2003年のデータによれば、小学校卒業者の平均月給(男女合計)はS\$1,000、中卒でS\$1,408、高卒はS\$1,733、大卒はS\$4,333(Ministry of Manpower 2003)となり、小学校卒業者を1とすると、中卒で1.4倍、高卒で1.7倍、大卒では4.3倍の給与を得ていることがわかる。最終学歴別にみた労働力率も明らかに、最終学歴が高くなればなるほど、労働市場への参入も高い傾向を示している。

(2) メイド雇用の先行研究

シンガポールにおける共稼ぎ世帯に関してはDepartment of Statistics (1994)が、メイド政策の展開に関してはSwee-Hock (2005)、Lee(1999)、Yeho (1999)やYeho and Huang (1998)が、またメイドの派遣プロセスや子育て家族とメイドの関係は宮坂他(2003)に詳しい。

海外における日本人駐在員の妻を対象とした研究には西(2004)やLeng, Goda and MacLachalan (2005)などがある。西(2004)は香港に住む夫婦とも日本人の駐在員家庭でメイドを雇用することによって家事分

担や主婦役割意識に与える影響を受けているか、28人のメイド雇用者と、比較のために5人のメイド雇用未経験者に対してヒアリング調査を行った。その結果、メイド雇用に伴い、それまでなじんできた主婦役割に対して、主婦自身が疑問を感じはじめていること、子どもがいてフルタイムで働き続けている香港人女性に対して羨む気持ちが見受けられること、などを明らかにしている。またシンガポールで生活する日本人にアンケート調査を実施したLeng他（2005）では、既婚者75人の回答ならびにヒアリング調査から、シンガポール人と結婚した日本人はそうではないものの、日本人同士の夫婦ではフルタイムのメイド雇用よりパートタイムの雇用を好む傾向があることを明らかにしている。

しかしながら、仕事と家庭生活の両立を図ろうとしている共稼ぎ世帯の立場からメイド雇用を分析した研究や家計の観点からメイド雇用経費を分析した研究はあまりみられない。本稿ではこの観点からの分析をすすめる。

3. 調査方法

調査対象者は「大学卒業」、「子どもがいる」、「正社員の仕事をしている、もしくはその経験をもつ」、「現在、メイドを雇用している」と「配偶者もプロフェッショナルとして仕事をしている」の5つの条件を持つ女性である。対象者の選定はシンガポール国立大学に勤務する教員に紹介してもらった5ケース（No.1-No.4, No.6）、個人的な伝手でヒアリングを依頼した2ケースである（No.5, No.7）。大学進学率がようやく23%（2001）に達し、かつ最も出生率の低下しているシンガポールで、出産経験のある大卒となると年齢的には40歳前後となる。ヒアリング協力者の平均年齢は41.6歳、月給平均はS\$7,250（約54万円、1S\$=75円）、子どもの平均人数2.1人、平均年齢10.8歳である（表1参照）。

ヒアリングは、予め用意した質問用紙に沿った形で行った（半構造的ヒアリング）。調査期間は2006年9月10日～9月20日、場所は対象者の職場もしくは自宅で1.5時間～3時間のヒアリング調査を実施した。

内容は、1）メイド雇用の実態、2）収入ならびに家計管理、3）本人の教育歴とキャリア形成、4）日常生活時間、5）その他である。本稿では1）と2）に注目して分析を進める。

なお、No.6は日系企業に8年間勤務した後、第3子出産に伴い専業主婦になった事例、No.7はシンガポール人と結婚して現地で通訳として仕事をしているシンガポール滞在18年の日本人女性である。No.6は正社員の仕事を辞めた立場、No.7はシンガポールに生活する日本人の立場という比較の観点から分析を進める。

表1 対象者の属性

	本人					メイド			
No	年齢	国籍	職業	子ども	配偶者	年齢	月給(\$)	形態	出身
1	41	星	大学教員	2人(12男、5男)	会社員	34	310	住み込み	インドネシア
2	44	星	大学教員	1人(1女)	大学教員	30代	1,000	通い	インドネシア
3	42	星	大学職員	3人(15女、13男、9男)	会社員	27	300	住み込み	インドネシア
4	38	星	民間(製薬会社)	2人(12男、8女)	会社員	20代後半	300	住み込み	インドネシア
5	39	星	中学教員	2人(14男、11男)	会社員	26	250	住み込み	インドネシア
6	41	星	専業主婦	3人(12女、10男、9男)	会社員	26	300	住み込み	インドネシア
7	46	日	フリーの通訳	2人(16女、12男)	自営業	49	500	住み込み	フィリピン

(注)国籍「星」シンガポール、「日」日本

(注)年齢はヒアリング当時のものである。

(注)1S\$=約75円(2006年9月現在)

4. 結 果

(1) メイド雇用の実態

① メイドの出身国はインドネシアが多い

今回、調査対象となった事例では、No.2以外は子どもの年齢が、言語能力が獲得された就学児童以上であったこともあり、インドネシア出身者が多かった。「メイドの雇用は長女が生後3ヶ月の頃から。当初は乳幼児の言語能力を混乱させたくなかったから英語が話せるフィリピン人を雇用した。子どもたちが成長してから給与が安いインドネシアのメイドに変えた」(No.3)。その他、「フィリピン人は1ヶ月に1度以上、休暇を与えないといけないが、インドネシア人はその必要はないから」(No.5) という理由もあって、昨今ではインドネシア出身者が好まれているようであった。

② メイド雇用の開始は出産後が多い。

「結婚当初から雇用している」(No.5) 事例を除いては、「子どもができてから継続してメイドを雇っている。現在は6人目」(No.5) といった回答が一般的であった。

③ メイドが担当する仕事とその評価

「メイドは何でもする。食事作り、食器洗い、洗濯や洗濯など」(No.3)、「彼女は掃除、アイロンかけと夕方5時の子どもたちの夕食作りが主な仕事。アイロンがけだけは私より上手だが、料理や掃除は私の方がずっと上手だと思う。家事はうまくないが下手な点は見ないようにしている。料理は単純に炒めるか茹でたものが多い。私はチキンライス、カレーなど煮込み料理も作る。自分と配偶者のための夕食作りは週に4～5回は作っている。これまでメイドに料理を教えたこともあるが、習得するのに時間がかかった」(No.5) など、家事労働のうち、家庭内でできる掃除、洗濯といった単純仕事が主であり、メイドを雇用している主婦は経営管理を担当する。外出する必要がある食材の買い出しはメイドにまかせず、夫婦が週末に購入する事例が多かった。「食材の買い出しは週末、夫と車でいく。そこで買いだめして冷蔵庫に置いておき、メイドはそこから出して料理をつくる。シンガポールにはチキン、ブタや新鮮な果物を売っているウェットマーケットと普通のスーパーマーケットがあり、両方に買い出しに行く」(No.3)、「食材の買い出し等は私の仕事だから、現金をメイドに預けることはない」(No.5)。

「では、あなたはいったい、家事の何をするのか」と尋ねたところ、「中国料理や家族の好きな料理方法や掃除の仕方、洗濯方法など「我が家流」を教える。良質なメイドだと2～4週間で習得するが、覚えの悪いメイドだと数ヶ月かかる」(No.3)、専業主婦でメイドを雇用しているNo.6では「食事を作るのはメイドの仕事、私はメニューを考えたり監督、味見をするくらいだ」(No.6) という回答であった。

④ メイドと金銭管理

小学生がいる家庭では、子どもの塾の送り迎えなどをメイドが担当している事例もあった。「メイドに現金を渡す。週\$50くらい。息子たちをタクシーでお稽古事につれていったり、毎日ちょっとした買い出しにってもらう。レシートと釣銭をチェックすることはない。大きな金額でもないし、そこはまかせている」(No.1)、「メイドには週\$30とか週\$40とか渡す。spot checkでレシートとのチェックを行い、一応、チェックしているフリをしている」(No.4) などがある一方、「現金をある程度の金額、預けている。1週間単位でレシートをきちんとチェックする」(No.7) と、預けている金額の多寡に応じて、きちんとチェックするかしないか、決まるようであった。

⑤ メイドへの配慮＝疑似家族

「メイドのことは家族だと思うからメイドの誕生日にはケーキを買ってhappy birthdayの歌を歌い、クリスマスにはお小遣いも渡す。これら金額を合計すると1ヶ月相当にはなるだろう」(No.1) という事例もあったが、多くは家族・身内の一員としての感情は抱いておらず、金銭やプレゼントの贈与はなかった。

⑥ メイドの給与・経済的負担

住み込みメイドの1ヶ月当たりの給与は\$250から\$500であり、本人月給の3%～6%弱である(表2参照)。「メイドの給与は\$250(約2万円)だが、Levyという人頭税をメイド給与にはほぼ等し

い金額を毎月納め、かつ、彼女の食事代等も負担していることを考えると月\$400～500（約4万円）になるだろうか。感覚としては、自分の月給の1割強」(No.5)という。メイドの給与がどの程度くらいまでなら雇用するか尋ねたところ、「給与の倍はメイド関連で払っているから、月給としては\$600くらいまでか。それ以上かかるようなら雇わないだろう」(No.1)との返答を得た。日本で子どもを保育園に預けた場合、本人月給のほぼ半分の金額に達することを思うと、メイド雇用の経済的負担はさほど大きくはないといえる。

⑦ メイド採用時の重視項目

メイドは代理店経由もしくはそれまで勤務していたメイドの紹介が多い。採用するかどうか面接（電話もしくは直接面接）があるが、その際、重視する項目は「第一に母親であること。そうすれば母である私の気持ちをよく理解してくれるだろう。次に年齢が25～30歳であること。30歳をすぎたメイドはえてして怠け者だから」(No.3)や、「人格的に成熟していること、英語が少し話せること、そして料理の腕がいいこと」(No.1)をあげる事例もあった。

表2 対象者およびメイドの月給（\$）

No	対象者夫婦の職業		月給(\$)				妻割合(%)		メイド割合(%)	
	職業	配偶者	本人(a)	配偶者(b)	世帯収入(c)	メイド(d)	a/c	d/a	d/c	
1	大学教員	会社員	10,000	10,000	20,000	310	50.0	3.1	1.6	
2	大学教員	大学教員	6,000	4,500	10,500	1,000	57.1	16.7	9.5	
3	大学職員	会社員	5,000	10,000	15,000	300	33.3	6.0	2.0	
4	民間(製薬会社)	会社員	11,000	9,000	20,000	300	55.0	2.7	1.5	
5	中学教員	会社員	4,000	4,000	8,000	250	50.0	6.3	3.1	
6	専業主婦	会社員	—	15,000	15,000	300	—	—	2.0	
7	フリーの通訳	自営業	8,000	5,000	13,000	500	61.5	6.3	3.8	

(2) 子育てへの親の関与

メイドを雇用することで、掃除・洗濯といった家庭内家事は全面的にメイドに委任しているが、子育て、具体的には子どもの勉強をみたり、子どもと一緒に時間や経験を共有することは、親である自分たちの仕事と感じていた。専業主婦の事例では、「子どもたちが学校から戻ってくると勉強をみる。3人の子どもで1日計3時間くらいは勉強をみている。居間に子どもたちがおりてくるのではなく、私が子どもたちの勉強部屋にいつてみている」(No.6)。また、「自宅では私はとくに子どもの勉強はみない。子どもたちから質問があれば答えてあげる。しかし、昼間仕事をして自宅で帰って子どもたちにまた勉強、勉強というのは嫌だ。せっかく子どもたちと一緒に時間を過ごすのだから楽しく、仲良く、いろいろなことを話したい。子どもたちには何でも話す。オフィスであったこと、どのようなトラブルがあったか、そしてそれをどう解決したか。彼らも成長すると社会に出て働くわけだから、このような話題も共有する」(No.3)と、学習をするのではないが、一緒に時間を過ごし、キャリア教育とでもいう大人の仕事生活の一端を話している事例もある。

(3) 家計管理、妻の収入割合

「私は助教授で配偶者が客員研究員。私の方が給与が高い。世帯収入は月収\$10,000強。銀行口座は二人の共有名義になっている。それぞれの給与もその共有名義にはいる」(No.2)、「結婚した頃、彼は自営業で収入がなく、主たる生計維持者は私だった。アメリカで共同名義の口座をつくり、それ以降、何となく、私の稼ぎで生計をたてるようになった。その延長で現在でも私の収入（月収\$10,000）が専ら日々の支出に、配偶者の収入（月収\$10,000）は専ら、投資や貯蓄にあてている」(No.1)、「家計予算は、家族の食費、光熱費（電気ガス水道）とメイド費用からなり、それが月額\$2,000。この金額を配偶者と折半している。自分の給与月額\$4,000のうち、CPF（Central Provident Fund、中央積立基金）としての天引きが\$800（残\$3,200）、家計費として月額\$1,000（同\$2,200）負担する。残高\$2,200のうち、\$1,000は別途、

銀行に貯蓄している（平均貯蓄率45%）。残S\$1,200は子どもの塾代（長男S\$75/月額、S\$120/月額）と自分用。貯蓄率が高いのは子どもの教育費と将来の生計費のため」（No.5）、「1ヶ月私も配偶者もS\$3,000ずつ家計費として負担している。電気ガス光熱費、子どもの教育費と住宅ローンの支払いのため。1年半前に購入したプライベートハウスは高額でCPFローンだけでは賅えない。別途、金融機関から借金している。」（No.4）などである。

対象者全員が大卒であり、かつ正社員として威信の高い職業に従事していることもあって、政府統計による大卒平均月給（男女合計）S\$4,333を大きく上回る、高学歴高所得カップルである。家計管理は共有名義で一括管理している事例が多い。世帯収入に占める妻の収入割合は6ケース中、5ケースで50%を超える。

5. 考 察

以上の結果から明らかになった点は以下のようである。

① メイドを雇用して「家事」の外部化をはかる意味

対象者となった7ケースからは、メイドを雇用して「家事」の外部化をはかり、空いた時間を家族と一緒に過ごそうと家族と時間・空間・経験を共有することを重視していることがわかる。「せっかく子どもたちと一緒に時間を過ごすのだから楽しく、仲良く、いろいろなことを話したい。子どもたちには何でも話す。オフィスであったこと、どのようなトラブルがあったか、それをどう解決したか。彼らも成長すると働くわけだから、このような話題も共有する。親子で何でも話せるようないい関係を形成することが非常に大事だ」（No.3）。

② 外部化しない「子育て」と父親・祖父母の関与

父親が子どもを学校へ送り迎えを担当することに加えて、父親が積極的に育児に関与できるよう、母親が働きかけ、育児期間中は配偶者が早く帰宅できるように転職してもらった事例もある。「夫は転職前の職は対顧客のセクションだったから、会合だ、ディナーだ、カラオケだと帰りが遅かった。また1ヶ月に1度は定期的に香港出張があり4日ほど留守にする。オーストラリア、アメリカ、ヨーロッパと海外出張も多かった。子どもが乳児のときは父親不在でもあまり問題はない。しかし幼児や児童になってくると父親不在は子どもの成長に悪影響を及ぼす。幼児・児童期の子どもにとり父親はとても重要。だから転職してもらった。現在は夜7時すぎには帰ってきて、子どもたちと一緒に夕飯を食べている」（No.3）。民間企業に勤務する事例も「配偶者が一緒に食事をとるのは8割くらい」（No.4）と、可能な限り、夕飯は家族一緒に食べることができるよう工夫している。彼らにとり、家族が夕食を手作りする「手作り規範」はそれほど重要ではなく、誰かが作った食事を一緒に食べるの方がずっと重要であると認識していた。

このように、食事作りや洗濯といった家庭内家事は外部化させることに抵抗がないが、「子育てを他人に任せるなんて、信用できない」（No.2）の言葉が単著に示しているように、育児の外部化には抵抗があるようだ。このような意識があって、「シンガポールでは月曜日に子どもを親に預けて、金曜日夜、ピックアップする事例が多い」（No.1）。親が子育てできない場合は、保育所より親世代に子育てを頼っている。「長女は夫の母親にみてもらった。月曜日の朝、彼女を連れて夫の実家に行き、金曜日の夜、ピックアップしてきた。第二子である長男の時は、二人を毎日朝、連れていって、毎日夜つれて帰るようにした。第三子である次男を授かった頃、メイドを雇用しはじめた。それは長女が私＝母親に懷かず、祖父母を恋しがるようになって、長女と私の間の結びつきが形成できていないことに気づいたからだ。仕事は労働条件もよかったし、継続就業するものと思っていたから辞めるかどうかすごく迷ったが、子どものため、子どもにより良い教育を与えるため、さらにいえば配偶者の給与が高かったので経済的に働く必要もなかったから、辞めた」（No.6）。

また、現在、1歳の子どもがいるNo.2では、「バスに乗って実母が月～水は1日中、家にきて手伝ってくれる」という。ただし、「母親世代（70歳代）は子どもを大学にやったのだから、その見返りに、自分の老後の経済支援は大卒の子どもが行うのは当然と考えている。だから子育ても無給ではなく仕事。私は親に毎月S\$400、子育て代としてお金を渡している。およそ私の月給の1割だ。中国では大学まで

子どもを出した親は老後の経済的支援を子供から受けるのが当たり前で、タクシーの運転手も「自分は子どもを大学まで出したのに毎月S\$50ドルしかてくれない」と文句をいっていたから、この知見は私の限られたサンプルに基づく私的観察事実というより、自分の親世代（中華系）特有の普遍的な現象だと思う」(No.2)。

このような状況に対して、世代間交流の専門家でもあるNo.1の対象者は、「シンガポールは子の世話を親世代に依存しすぎている。高齢者は高齢者の生活をしたいだろう。理想をいえば現在分断している私的領域と公的領域が、もう少し融合すればいいと考えている。たとえば保育所に子どもを預けて、高齢者は気がむいたら出かけていって孫の顔を見て、そこで一緒に時間を過ごせるようなスペースがあればいい」(No.1)と提言している。

③ メイドの存在に対する評価

共稼ぎ世帯ではその7世帯に1世帯が住み込みのメイドを雇用しているといわれている(Thang (2005))が、家庭内にメイドという他人が住み込みで存在していることに対して必ずしもいいと思っているようではなかった。「シンガポール人がメイドを雇っているのは安いからだ。メイドがいる生活がいいとは思わない。(来年から1年間滞在する)オーストラリアではメイドのいない生活になるから、帰国したらメイドを雇わないかもしれない。おそらく、皆そう思っている」(No.1)、「契約と契約の間で、メイドが不在のときもあった。そのとき食事はすべて外食、アイロンかけは自分のものは私が、配偶者のものは配偶者が、子どもたちのものは夫婦で分担した。すでに子どもたちも大きくなったから、メイドはいなくてもできる」(No.4)という。

至る所にホーカーズ・センターがあり、夕食は外食することが当たり前の国シンガポール。子どもたちが自分たちの部屋の掃除をする年齢に成長したら、メイドを雇用することなく家族だけで生活していきたいと考えているようだった。

誰しも1日は24時間と有限である。そのような中、家庭生活と仕事生活を両立しようとするとき、何かを外部化せざるを得ないだろう。シンガポールのように家事を外部化するのか、それとも日本のように育児を外部化するのか。さらには、ライフステージに応じて外部化する対象を交換・選択できる仕組みを構築していくことも考えられる。ヒアリング調査を通して、我が国において育児はより内部化させ、家事はより外部化させる方向を模索することが必要ではないかと思う。いずれにせよ、外部化に関しては、日本という国の事情にそった新たな仕組みを考えてる時期にきている。

同時に、今回ヒアリング調査対象となった既婚女性たちは、大卒の平均給与を大きく上回る給与を得ており、総世帯の2.6% (Census of Population 2000)といわれる一戸建て(プライベートハウス)に居住する、非常に経済的には恵まれた階層であった。シンガポールに居住する、一般的な共稼ぎ世帯に関する研究をすすめていくことが今後の課題として残っている。

附記

ヒアリング調査にご協力いただきました皆様には、この場をお借りして御礼申し上げます。なお、本稿のもとになる研究は、平成18年度日本学術振興会特定国派遣研究者の助成を得て行われたものである。

参考文献

Department of Statistics, 1994, *Dual-Career Couples in Singapore*

Lee Jean, Kathleen Campbell and Audrey Chia, *The Three Paradoxes : Working Women in Singapore*, AWARE

Swee-Hock Saw, *Population Policies and Programmes in Singapore*, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore

- Thang Leng Leng, Miho Goda and Elizabeth MacLachlan, 2005, *Negotiating Work and Self, Japanese Working Women in Singapore*, NUS
- Tambyah, Kuan Siok 2003, *Married Women in Singapore: Lifestyles, Route to Fulfillment, and Balancing Work and Family*, School of Business, National University of Singapore.
- Yeoh S.A. Brenda, Shirlena Huang, and Joaquin Gonzales III, 1999, Migrant Female Domestic Workers: Debating the Economic, Social and Political Impacts in Singapore, *International Migration Review*, vol. X X X III, No.1
- Ministry of Manpower, 2003, *Report on Labor Force in Singapore*
- Singapore Department of Statistics, 2006, *Singapore in Brief 2006*
- 高橋桂子 (2005) 「デュアル・キャリア・カップル：先行研究の概観」『新潟大学教育人間科学部紀要』Vol.8, No.1
- 西麻里子 (2004) 「メイド雇用家庭における家事分担と主婦役割への影響」『家族社会学研究』第15巻第2号
- 宮坂靖子他 (2003) 『アジア諸社会におけるジェンダーの比較研究』科研報告書